

大使からの活動報告 2013 年 11 月(算数教科書プロジェクト他)

2013 年 11 月 23 日

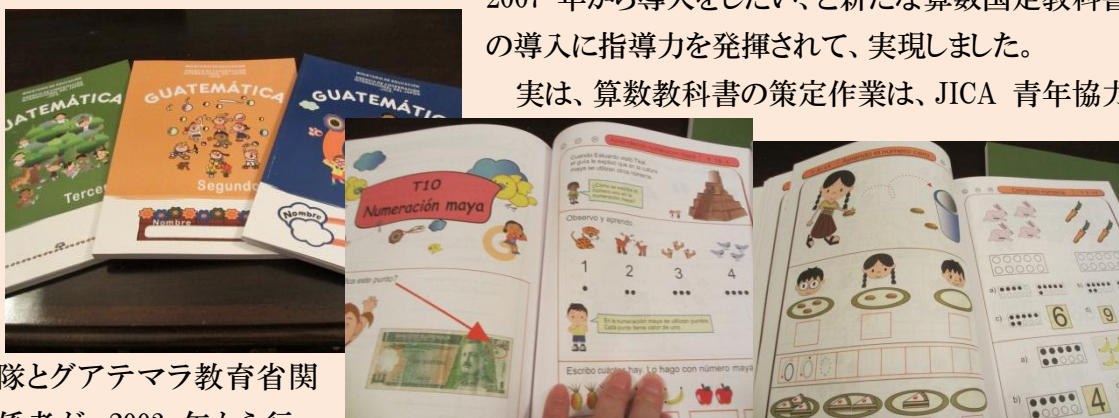
在グアテマラ日本大使

川原 英一

◆日本の協力によるグアテマラ算数教科書を 2007 年から導入

2005 年に日本を訪問したアセーニャ教育大臣(当時)が、日本の小学校における優れた算数教育を目の当たりにして、感銘を受け、是非、グアテマラでも日本のような算数教育を 2007 年から導入をしたい、と新たな算数国定教科書の導入に指導力を発揮されて、実現しました。

実は、算数教科書の策定作業は、JICA 青年協力



隊とグアテマラ教育省関係者が、2003 年から行っ

てきており、策定された教科書は、グアテマラのモデル小学校でまず実施をして、内容改訂作業を繰り返したそうです。最初に印刷された新算数教科書は、教育省の予算不足で白黒刷りでしたが、その後、予算が確保されて色刷りとなりました。たくさんの挿絵があり、子供たちが楽しく、理解できる内容(上記写真を御参照)となっております。

2008 年に国内で実施された算数能力比較試験では、モデル小学校 20 校と新教科書を使用していなかった小学校との双方で実施された試験結果、学年別平均点数が、2 倍以上の開きがあり、新教科書が、算数能力を高める画期的内容であることが確認できたそうです。

新算数教科書にもとづく児童の指導を小学校の先生がしっかり行うため、教員に対する研修の必要性を理解し、教員組合や教育省に積極的に働きかけを行ったのは、グアテマラ唯一の国立大学であるサンカルロス大学教員養成校の校長であったオスカル・ロペス校長です。教師への研修受講に奨学金をつけて実施し、今では、全国の小学校教員 8.5 万人のうち、2 万 5 千名の教師がこの研修を終えています。

今年 9 月からは、サンカルロス大学の数学・物理の教授の皆さんと教育省の方々、日本からは JICA 専門家の川澄さつき(右写真の後列左から二人目の方)さんが、中学の算数教科書の策定作業中であり、現在、毎週 2 日のペースで作業されています。来年 1 月頃、最初の中学教科書案が出来上がる予定で、今後の成果が注目されます。



日本がグアテマラ政府に協力して作成した新しい小学算数教科書で、興味深い点は、紀元前からグアテマラ・ホンジュラスやメキシコなどで栄えたマヤ文明で使用されたマヤ数字が、小学校1年から、併せて、教えられていることです。小学生から、しっかりと学んでほしいとのグアテマラ教育省の願いが実現しました。マヤ数字は20進法による表記で、ゼロの数字概念がインドより先に使われていたというのも、意外な話です。現在のグアテマラ紙幣の右肩にマヤ数字での表記もなされています、との教育省レイバ次官からのお話を聞いて、さらに驚きました。

■母と子供の健康プロジェクト JICA 専門家の活動報告

11月8日、本田 JICA 専門家(右写真の右側からお二人目)から、グアテマラ西部(ケツアルテナンゴ県他2県)で進められている母と子供の健康プロジェクトに2年3ヶ月従事をされた後、帰国する前にお話をお聞きする機会がありました。妊婦と乳幼児の健康増進のためには、県内の病院と地域保健施設との連携強化により、危険な兆候のある妊婦さんに対する医療サービスを向上すること、妊婦家族の理解と協力を



得られるよう、日頃の啓発活動の推進と母親ボランティア組織づくり、低体重出生児と妊婦との因果関係を調べて、産婦人科医・小児科医が連携した医療が実現できるよう取り組みを奨励するなど、地域の保健所と地域病院との間で連携したケア向上に向けてのきめ細かな支援活動をされておられました。

母子の健康向上に向けた活動の中で、グアテマラ人ソーシャル・ワーカーと指導者の活躍が今後ますます大きな役目を果たすことになること、また、こうした取り組みの成果をもとに、厚生省として全国展開を検討中です、との注目すべきお話がありました。



◆全員参加の日本人学校運動会◆

11月9日、グアテマラ日本人学校(寺西穰校長)の第35回運動会が開催されました。今年の運動会はお天気に恵まれました。児童・生徒の皆さんが、日頃の練習成果を発揮したばかりでなく、御父母の皆様、参加された在留邦人の方々全員も各競技に参加されました。当方も、玉入れ、大玉送りといった競技に参加した他、運動会の華となっている千メートル走のスターター役や、大会名誉委員長として、優勝杯、メダル授与など



させて頂きました。特に、入場式(左上写真)、応援合戦(上写真)、組み体操(左の写真)は、1年生から中学生までが一緒にな

って、見事な演技を行い、日頃の練習の成果を大いに発揮されていました。児童・生徒、参加されたすべての皆さんが楽しめた良い運動会でした。

■ 日系企業 CODACA 主催のトラック整備士技能コンテスト(11月19日)



丸紅と当国企業 SIKA が共同出資して設立した CODACA 社は、当国で 1972 年から日野トラックの販売ディーラーとして活躍しています。現在は、日野トラックの販売のみならず組立も行っており、特に、販売後の顧客企業へのサービスを重視し、整備体制を全国展開しています。大口の顧客として、有名な米系ソフトドリンク販売会社、地元ビール販売会社の輸送トラックの整備を一手に引き受けています。また、同社は、エルサルバドル、ホンジュラス、ベリーズにも販売・整備のネットワークを展開しています。

さて、

同社は、毎年、トラック整備工の技能コンテストを実施しており、今年、11月19日に11回目のコンテストを実施しました。



CODACA 社員、丸紅、日野自動車の中米関係者が参加する同社コンテストの開会式にお招きを頂き、ご挨拶を申し上げます(上写真及び右の写真)。毎年実施するこのコンテストは、この地域におけるトラック整備技術の向上に貢献をしています。

同社には、600名以上の社員がおり、そのうち、200名ほどが整備工として全国の拠点地区に配置されています。整備工は、技能別に三段階に分けており、ジュニア、シニアレベル、マスター・スピリットがあり、最上位の整備工は、同社には、現在20名おられるようです。この人材育成制度は、日野自動車の整備士養成制度に学んでいます。国内での研修以外に日本への研修派遣をしており、技能レベルが上のランクになれば、社内での待遇がよくなるシステムです。整備工の人材育成に地道に取り組み、大きな成功を収めています。



さらに注目すべきは、1995年に同社が高校を設立しています。国から高校として認定されるための設立要件を備え、卒業生の半数が大学等に進学、4分の1が、家業を継ぎ、残り4分の1の卒業性が CODACA に入社しています。ダニーロ・シェカビツァ同社会長(左写真の右から二人目)は、当国の数学・読解力といった分野の教育レベルの向上を図りたいと、社会貢献活動の一環としての活動として実施をしておられます。同高校の卒業生は既に1200名を超えており、大学卒業後に同社に専門職として就職する人もいるとのことでした。日本の経営スピリットを体現して、企業の人材育成と教育の向上に元気な取り組みを実施している日系企業を訪問出来、

大変に有意義な一日でした。

■訪日研修生の同窓会組織(Aguabeja)幹部との懇談

11月22日、過去の日本政府招待による訪日研修生の同窓会組織(Aguabeja)会長他5名の方々と公邸で懇談する機会がありました。同窓会会長によれば、これまでグアテマラからJICA研修目的で訪日された方は、1200名を超えるそうです。帰国した研修員の同窓会組織があり、現在、約400名の方が登録されています。



マリオ・エストラーダ会長(左写真の前列左端から3人目の方)は、国立水質研究所長をされています。2002年に宮崎県で11ヶ月間研修をされて、現在も日本語でお話ができます。また、オットー・レオネル副会長は、グアテマラ市の防災責任者をされています。他の理事の方々も各地で御活躍をされています。毎月、役員会があり、自前のHPを運営されています。また、毎年総会が開かれ、200名以上の会員の方が参加されています。来年はじめ、中米地域の同窓会組織総会が、グアテマラで開催予定であるとお話もありました。現在、会員間のコミュニケーションが非常に良く、活発に活動していることを伺いました。

今回の懇談では、グアテマラでの教育の質向上が強く望まれていること、また、5才以下の子供の死亡率の8割が、汚染された水の摂取による疾病によることから、きれいな飲み水へのアクセスを拡充することが重要課題であるなど、皆さんから深刻な事情をお聞きました。

当方から、2015年に予定されている日本とSICAとの交流年に向けて、同窓会からの御支援を期待することを申し上げ、今後も同窓会幹部との懇談の機会を持ち、相互の活動の中で、連携、協力を図っていくことになりました。(了)